

# ESSAY いたずら

倉元信行

13

## 運動オンチ

小さい頃から運動が苦手だった。子供の多くは体育の時間を楽しみにしているのだろうが、私には憂鬱な時間ではなかった。

飛び箱はみんなが飛んでいる一番低いのが飛べず、鉄棒は蹴上がりが出来なかった。水泳は、いまだにカナヅチである。

運動会はみんなが見ているので苦痛でさえあった。

小学校の時は6人ずつで走るのだが私はいつもビリだから、弁当を持ってござの上で見ている母も、転ばなければいいとぐらいいにしか思っていなかったらう。

ただ、家に帰ってから友達と駅の広場でやる三角ベースの野球だけは別で、日が暮れるまで遊ぶ事も多かった。

母に、テニスで活躍したと、話しかけた事がある。にやっと笑って、何も言わなかった。はなからテニスをやる姿など信じられないのである。

昭和46年、会社に入った私たち技術系の新入社員は3か月間の現場研修を受けた。化学会社だから多くの製造現場を持っている。

新入社員は短い期間であるが各現場で、会社の事業の源となっている所を勉強するのである。

私が配置された現場には、Sさんとけんというテニス好きがいて尻込みする私を無理やりコートに引っぱり出した。

前衛に立つと、恐くて球をよけて笑われるような事から始まったのだが、毎日毎日の積み重ねは少しづつ球を捕らえる感覚を覚えてくれた。

私が途中で投げ出さなかったのは練習後必ずみんなで飲

むビールのうまさにあったことだけは間違いない。西日本の陽は長い。夏場は8時過ぎまで明るいので練習はたっぷりやる事ができた。

つくば市にある無機材質研究所という国立の研究所に、会社からセラミックスの勉強のため派遣されたのは31才の時だから、入社以来すでに6年余りのキャリアを積んでいたことになる。

この研究所では多くの人がテニスを楽しんでいて、3面あるコートはいつも大賑わいであった。私は厚かましくも最初の日からこの中にもぐり込み、1年半思う存分駆けまわった。

所内のシングルス大会で準優勝したためか、メンバーに入れてもらった県の団体戦では、シングルスとダブルスの5試合全部に勝って研究所のランクを一つあげるのに貢献した。

所定の派遣期間を終え、会社に帰るのが近づいた夏のある日、コート上でカメラを抱え、三脚を立てる準備をしている人がいる。

ダイヤモンドの研究などで著名な I 先生で、

テニス部の顧問的な存在であった。

なんと私の写真を撮ろうとされているのである。

愛用のウィルソンのラケットを構えて球を追うこの写真は、大きく引き伸ばされ私に手渡された。その上立派なお饂飩の品まで届けられた。

それには約40名のテニス仲間の名前があった。

うれしかった。

その方達はコートを離れればほとんどが博士号を持つ最先端の研究者達である。普通なら、目にも留めないだろう企業から勉強に来た短期派遣の若者を、テニスというスポーツをしていたことによって、あたたかく迎え、あたたかく送ってくれたのである。

会社に戻った私は、一人一人に心を込めてお礼状を書いた。

そして20年前のこの写真は、だいが古ぼけてきているが今も寝室に大事に飾っている。

と言っても、私の戦績はたいしたものではない。団体戦は別として、個人戦で優勝した覚えはない。

藤沢市実業団のダブルスの大会で3位とか、家のすぐ近くに在ったので会員となっていた“相模原グリーンテニスクラブ”のシングルス大会で準優勝とか、せいぜいそんな程度のものである。

しかし運動オンチの子供時代を振り返れば、大した進歩であるには違いない。

今でもテニスは続けている。週一回の練習日は楽しみにしているし、実業団の団体戦にも出させてもらっている。

こんなに長くテニスというスポーツにつき合うことが出来たのも、おいしいビールのおかげである。

